

2022年8月

『康子十九歳 戦渦の日記』につないで みんなで学習会

◆◆◆ 8月の読書会から

「康子さんの声をつなぐ」本が紹介されました。

7月の課題本から見つけたテーマを考えるために、資料となる本を読みました。会員同士で重なった本もありますが、ほとんどが自分とは異なる視点で「戦争の本質」を考えられるものだったように思います。参加した一人一人が、選んだ本からの「学びであり、思い」を自分の言葉で語り、人の言葉に傾聴する中で、戦争の本質が、見えてきたのではないのでしょうか。そして自分の視野も広がったように思います。自分では決してつかみそうもない本をつかみ、語り、お互いが物語れた3時間半でした。「やっぱり、読書会はいいです。」

紹介された本を一覧表にしてみました。また、会員の紹介された本が絶版になったものもありましたので、現在、手にすることができるものを調べて載せています。また、初版と翻訳者が異なる本、同じ本でも単行本と文庫本の両方で出版されたものもありました。世話係としては、8月の読書会の報告として紹介本を(ちょっとだけ詳しく)紹介してみました。

(出版社に許可を取る時間がないので、本の映像は載せていません。)

書名	作者・著者・翻訳等	出版社
新訳 終戦日記 一九四五 ※訳者の解説より「ロシアによるウクライナ侵攻の2022年を銘記せよ」と言いたい	エーリヒ・ケストナー 酒寄進一/訳	岩波書店 2022年6月
ケストナーの終戦日記—1945年を忘れるな— (単行本)	エーリヒ・ケストナー 高橋 健二/訳	駿々堂出版 1985.7.1 出版
ケストナーの終戦日記—1945年ベルリン最後の日 (文庫本)	エーリヒ・ケストナー 高橋 健二/訳	福武文庫 1990.1.1 出版
文部省の研究 「理想の日本人像」を求めた百五十年	辻田真佐憲	文藝春秋 2017年
わたしが子どものころ戦争があった	野上 暁/編	理論社
わたしの終戦記念日	インタビュアー 瀬谷道子	新水社
ダウンタウン・ヒーローズ	早坂 暁	新潮社
そして、メディアは日本を戦争に導いた	半藤一利・保阪正康	東洋経済新報社
政府は必ず嘘をつく	堤 未果	角川新書
対日宣伝ビラが語る太平洋戦争	土屋礼子	吉川弘文館
池上彰の「天皇とは何ですか？」	池上 彰	PHP 研究所
知覧からの手紙	水口文乃	新潮社

ホテル帰る 特攻隊員と母トメと娘礼子	赤羽礼子・石井 宏	草思社
群青 知覧特攻基地より	知覧高女なでしこ会/編	高城書房出版
すみれ島	今西祐行 松永禎郎/絵	偕成社
特攻隊振武寮 帰還兵は地獄を見た	大貫健一郎・渡辺 考	講談社
不死身の特攻兵	鴻上尚史	講談社
原爆の子	長田 新/編	岩波書店
きけわだつみのこえ 第二次世界大戦末期に戦没した日本の学徒兵の遺稿集 初版1949年	日本戦歿學生手記編集委員会/編	東京大学協同組合出版部
きけわだつみのこえ 日本戦没学生の手記 (岩波文庫版 1982年) 他	日本戦没学生記念会/編	岩波書店
きけわだつみの声 〈全集・現代文学の発見第14巻大岡昇平/責任編集〉	日本戦没学生記念会/編	學藝書林
きけわだつみのこえ 日本戦没学生の手記 (1959年初版に「第1集」として冠して再発行) 他	日本戦没学生記念会/編	光文社
被爆教師	石田 明	一ツ橋書房
折り鶴の子どもたち 原爆症とたたかった佐々木偵子と級友たち	那須正幹	PHP 研究所
なぜ君は絶望と闘えたのか 本村 洋の 3300 日	門田隆将	新潮社
1944-1945 年 少女たちの学級日誌 瀬田国民学校五年智組	瀬田国民学校五年智組 吉村文成/解説	偕成社
戦争の時代の子どもたち 瀬田国民学校五年智組の学級日誌より	吉村文成	岩波ジュニア新書
少女たちの戦争	中央公論新社/編	中央公論新社
田辺聖子 十八歳の日の日記	田辺聖子	文藝春秋
私の大阪八景	田辺聖子	KADOKAWA
永久保存版 半藤一利の昭和史	文藝春秋/特別編集	文藝春秋
鋼鉄はいかに鍛えられたか	N.オストロフスキー 金子幸彦/訳	岩波文庫
戦争と人間と魂 寂聴文学の原体験を聴く	瀬戸内寂聴・小池政行	かもがわ出版
ルミちゃんの赤いリボン 一つだけとまったらかえってくるといったのに	奥田貞子・宮本忠夫/絵	ポプラ社
日・中・韓 平和絵本 へいわってどんなこと?	浜田桂子	童心社

(文責:世話係)

『康子十九歳 戦渦の日記』に 繋いで

講師 吉川五百枝

19歳で亡くなった皇国の少女は、思いを日記に手紙に、書き残しています。1945年終戦の年の秋、康子さんは広島原爆2次被災の原爆症で亡くなりました。残されていた日記や手紙に書かれた時代を映す言葉を、私は、先月例会感想文でメモ③に書きとめました。康子さんは、これらの言葉をどこから手にいれたのか？「教育」の中にあるに違いないのです。人間は言葉で思考します。言葉が脳を染めていくのです。

【メモ③】では、「戦局は一大飛躍をとげ」「若桜の壮挙」「純粋な正義感と愛」「国の恥」「特攻は目的であって手段では無い」「愛国の至情萌ゆる」「誇りと気高さを失わなかった日本人」「死ぬことでしか国への忠義は果たせない」「出陣していく人は神々しい」「皇国の必勝」「悠久の大義」「一億全心全霊の聖戦」「天皇の為に死ぬる」と取り上げました。あれほど聡明な康子さんが、書き記した言葉たち。康子さんがそれらの言葉に全く疑問を抱いていないことに疑問を抱いたのは、私の方でした。

そして、読んだ本は――。

『文部省の研究 「理想の日本人像」を求めた百五十年』

(辻田真佐憲 著 文藝春秋 2017年)

【この本の内容レポート 137ページまで】

明治が始まり、1872年「学制」公布。1879年「教育令」に変わる。新政府は、欧米列強に対抗して日本の近代化を図るためには教育が大切だと考えた。洋学、国学、儒学が柱となる。中央集権的な教育制度を発足させた明治政府の指針では、国家の独立維持が最高目標だった。これに天皇の儒学の道徳観が加わり「仁義忠孝」によって人格を形成するという道が次第に進む。

教育方針はその後、大きく揺れるが、1889年「大日本帝国憲法公布」。1890年「教育ニ関スル勅語」(教育勅語)が出され、1948年(戦後3年)に排除失効するまで、時の政府の意向をおしつけるのに役立てられた。そこには、「神国日本」や「八紘一宇」の文字は無いが、元々「朕惟ふに」で始まり「天壤無窮の皇運を扶翼すべし」とあるのだから、方向性は見えている。

1910年の国定教科書の制定に「忠君愛国」とか「女子の務」などが出てきて、儒教的な徳目や家族主義が目立つ。第一次世界大戦、関東大震災後の混乱を切り抜けるために頼ったのは天皇の権威だった。「公德」「質実剛健」「忠孝義勇」の文字が詔書にみえる。1933年(満州事変2年後)の国定教科書では、「国体観念」「日本精神」「天長節」「紀元節」がとりあげられている。1937年(真珠湾攻撃の4年前)文部省は『国体の本義』を刊行した。この中で、生活の基本単位は「家」であり、皇室を宗家とする一大家族国家を形成するのだと述べている。本当の「和」は「大和」である。「生死一如の中に忠の道は全うする」「没我一如は武士道の現れ」という解釈が掲げられる。

(「生死一如」「没我一如」がこんな形で使われているのは驚きでした。⑤)

1937年日中戦争勃発。「国民精神総動員実施要項」を決定します。「挙国一致」「尽忠報国」「堅忍持久」などがみえる。

同年「大政翼賛会」発足。1939年「陸軍現役将校学校配属令施行十五周年記念親閲式」が行われ、「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」が“下賜”された。気概があり恥を知ることが第一義と述べられている。「学徒とは、幼稚園小学校から大学にいたるまですべての学校において学を修めている者」と明記された。

1940年「基本国策」として「八紘一宇」「大東亜新秩序」「自我功利の思想を排し、国家奉仕の観念を第一義とする国民道德の確立」も見えます。陸軍省文部局と擲揄された文部省は、国策に応じて『臣民の道』を編纂した。「天皇への絶対随順のまことを致す事が臣民の道である」という内容だ。

1941年国定教科書が改訂された。国家主義一辺倒で日本を「きよい国」「神の国」「強い国」「えらい国」と讃えました。教材になったのは、個人的英雄ではなく、集団一部として戦った軍人だった。戦局が厳しくなると、文部省は戦争のための機関に成り果てた。1944年学徒動員本部設置。「一億国民総武装」を閣議決定。学童疎開開始。1945年「戦時教育令」を公布。8月15日終戦。

(本文は、終戦後も最終 259 ページまで続く)

【読後感】

大まかなレポートを書いてみると、この国の「教育観」の変遷がよくわかります。

康子さんの日記から拾ったメモ③の言葉の殆どは、政府が発した国策の解説文に載せられたものだったと思います。康子さんだけが脳を染められたのではなく、国民全体が染まって行きました。「大本営発表」を受け入れたように。

繰り上げ卒業や学徒出陣に反対していた帝国大学の学長さん達も、最終的には国の決定にモノ申せなくなったのです。国民がお互いに言葉で育て合った戦争への意思。

『それでも日本人は「戦争」を選んだ』(加藤洋子)のです。

世界大戦が終わって 77 年。康子さんが生きておられたら、どんな精神を表現されているでしょうか。19 歳で閉じた生涯を、そこまでで完了としてしまったら、康子さんは、それ以後の変化したはずの自分を表現できないのです。

この日記は、「康子」という個人名を仮につけて、人間を染めていく戦争というものを“記号化”して記しているのだと思います。様々な価値観が変わった戦後を生きて来た作家さん達は、それぞれに戦中と戦後を繋いで、自分の変化も書くことができました。しかし、戦争によって人生を断たれてしまった人達は、自分で自分の変化を書くことができません。どんなに残念なことか。

77 年後を生きている今の私たちが、断ち切られて“記号化”したその続きを、戦争の本質とは何かと読み取る事によって生き返らせる事ができます。

今回は、『康子十九歳 戦渦の日記』で使われた言葉の跡をたどりました。それによって、康子さんが、今の時代に蘇って語るような気がします。康子さん、一緒に【地球上に兵戈無用】と言いましょ。肉体が終了しても、この言葉が生き続けるように。(2022年8月15日 記す)

『康子十九歳 戦渦の日記』につながる「本」を読んで

◆【 TK 】

『池上彰の「天皇とは何ですか？」』 池上彰著 PHP研究所 2018年

栗屋さん家族の本を読んで、どうしてこんなに優等生で家族思いなんだろう、と感心しました。

昔は親に対しても敬語です。しかし学んで見ると天皇と教育勅語の影響であることもわかりました。

敬語には敬うというだけでなく、相手への存在と立場を尊重する気持ちもあるそうです。家族に対する敬語はこれだと思いました。

教育勅語は天皇を神として日本の戦力をまとめる目的がありました。これは日本の国という宗教みたいなものです。日本人の気持ちを統制してまとめる気持ちから作られたのですが日本は弱い国だったため周りの国に負けないために作られていたのです。

教育勅語は GHQ と日教組によってこれがふさわしくないことで廃止されました。しかし今なお、天皇は存在しています。しかも伝統と法律により高められています。今回天皇について調べてみました。

日本書記、古事記からの天皇で125代目の現在の天皇。池上彰著のこの本での時点ですが。中国へのアピールのためか初期は架空の天皇とされています。しかし豪族があつまって大和朝廷とかを経て現在に至っています。

現在は、天皇は政治に対する力はなく、政治家を任命する立場と祭事等の行事を行う立場となっています

お仕事も多く火曜金曜日は決定事項の印を押す作業が沢山おありとのこと。

ちなみに華族等は廃止しています。

そして素顔は質素でいらぬ紙が引き出しに沢山あって裏を使ってメモ用紙にされているとのこと。

日本はもはや軍国ではありません。お金、支配、軍部といつの時代も弱者が巻き込まれる要素ですが、他国も日本の失敗から学んで平和であってほしいこの頃です。

◆【 JM 】

『折り鶴の子どもたち ～原爆症とたたかった佐々木禎子と級友たち～』 那須正幹著

PHP 研究所 1984年

7月に『康子十九歳 戦渦の日記』の関連図書として紹介した『わたしが子どものころ戦争があった ～児童文学者が語る現代史～』(理論社)の中で著者の那須さんが「PHPからノンフィクションを頼まれて、禎子さんの友だちに集まってもらい、話を聞いた。しかし、最初は思ったような話が聞けなくて、困ったなあと思った。いままで語られているような禎子さんの美談だけではない素顔にも迫りたいと思い、子どもだから当然嫌いだったという人もいるはずだと思って探したら、1人だけいた。「禎子さんのことが嫌いだった人も含めて、いろいろな人の話も聞いた。1人だけから聞いては、絶対にうそがある。立場が違うと見方も違う。」と語られている。その取材姿勢に共感して読んでみようと思った。

「第一部 禎子さん」「第二部 原爆の子の像の建設」の二部構成で、第一部では禎さんが6年生になってからの学級の様子、年明けからリンパ節の腫れなどの体調不良が出始めたこと、2月の入院から10月の死までの様子が書かれている。禎さんが在籍していた幟町小学校6年竹組は、学級目標に「団結」を掲げ、運動会の学級対抗リレーの練習をクラス全員で毎日行うなど、結束力の強い学級だった。禎さんが入院してからも級友たちはグループ毎に毎日のように見舞っている。しかし「団結の会」と名付けた級友たちも、中学校に入学するとそれぞれ忙しく、見舞の回数も減っていく。そして知らされた禎さんの死に、級友たちは後悔の念に駆られる。通夜の席で語られた「毎年禎さんの命日には集まろう。できれば墓参りをしたい。佐々木家の墓は三次なので、お金を出し合って広島にお墓を建てよう」という言葉が原爆の子の像の建設につながっていく。

第二部では、そんな級友たちの思いが、原爆被害者の会との関わりの中で動き始める。広告で開催された全国中学校校長会でビラを配ったことから幟町中学校に寄付金が集まり始め、中学校は「原爆の子の像建設準備委員会」を設立、そして市内の小中高の「広島平和をきづく児童・生徒の会」へと引き継がれていく。「禎さんのお墓を建てたい」という子どもらしい願いから全市的な運動へとようになっていくのである。団結の会のメンバーとも溝ができていく。このあたりの事情を著者は丁寧な取材で明らかにしている。

原爆の子の像完成後も原爆ドームの保存活動や折り鶴の会の活動など運動は続いている。著者の那須さんは言う。「鶴を折って平和がやってくるわけではないだろう。だが折らないより折る方がいい。」この言葉に感銘を受けた。読まないより読む方がいい。知らないでいるより知る方がいい。学ばないより学ぶ方がいい。

◆【佐村 蘭子】

7月の課題図書『康子十九歳 戦火の日記』読書感想とこの本につながる本について

7月の読書会の課題本『康子十九歳 戦渦の日記』を読んでまず感じたことは、

○康子さんの言葉使いがとても丁寧で美しい言葉を使っている。

○19歳とは思えないほど、心が落ち着いていてゆるぎなさを感じる。

○原爆投下時の広島市の市長さんの娘として幼い時から礼儀作法、学問、人間としての生き方など様々な教育を受けていることがうかがわれる。

教育という観点では、自分自身の生き方というのではなく、家族のため、周りの人のため、国のためという教育を受けていてそのことに何の疑いもない？いいえ、あっても一途な康子には疑うという言葉は、自身の中から消していったのではないかと感じました。それが、その時代の教育だったのではないかと思います。私の父も近衛兵だったからかよくわかりませんが、天皇陛下が命を絶つと自分も命を絶つと母へ伝えていたようです。母もそれに従うという趣旨の手紙が残っており、母から見せてもらいました。まさに康子さんと同じなのです。戦時中の若い男子も女子も当たり前？のように、個人を大切に考える生き方ができない状況だったと思います。教育の力は怖いと感じます。

そこで、私にできることは何なのだろうと考え、絵本の読み語りを通して自分の考えが素直に言えることを伝えたいと思いました。戦争のことも、平和についても、まず自分の思っていることを表現することが、自分を肯定しつつ相手も受け入れていく行動ではないかと考えます。

一冊目の『ルミちゃんの赤いリボン』(奥田貞子作)は、広島から瀬戸内海の島に疎開していたお父さんとお母さんと三歳のルミちゃん、おじちゃん一家の話です。内容は、両親が広島に行った日、原爆が落とされた。「一つだけ泊まったら帰ってくるって言ったのに」と待ちわびる三歳のルミちゃん。おじちゃんに連れられて広島に探しに行ったためにルミちゃん自身も被爆してしまったのか、どんどん具合が悪くなる中、それでも毎日浜に出て待ち続ける。髪が抜け落ち、母が作ってくれたリボンで髪を結えなくなってもリボンを持ち続け、とうとう息を引き取る。

あまりにも残酷で、いつも読みながら涙が止まらなくなります。『ルミちゃんの赤いリボン』は、戦争の悲惨さや原爆の恐ろしさを今の時代に伝えていきます。しかし、一方では、戦争はしてはいけないものと分かっている、もう戦争は過去のこと、原爆が落とされたのもずっと前のことで今のことではないという風潮も見られます。が、決してそうではないと私は思っています。

2冊目の絵本『へいわってどんなこと?』(浜田桂子作)に昨年出会いました。へいわってどんなこと? 「きっとね、へいわってこんなこと。せんそうをしない。ぼくだんなんかおとさない。」 「いえやまちをはかいしない・・・」いろいろな視点から平和を考え、平和の意味を問い返しています。この絵本は、日本の絵本作家が中国と韓国の絵本作家に呼びかけ、三か国12人の協力で実現した平和を訴える絵本です。

へいわってどんなこと? 「おなかですいたらだれでもごはんがたべられる」「いやなことはいやだって ひとりでもいけんが いえる」「あさまで ぐっすりねむれる」「へいわって ぼくがうまれてよかったっていうこと」「きみがうまれてよかったっていうこと」「そしてね きみとぼくはともだちになれるっていうこと」平和と言われている今、一冊の絵本が平和っていったい何なのだろうということを生活の一つ一つから問いかけている。自分と自分の大切な人のために問いかけている。

2冊の絵本の違いと想いをしっかり心に入れ込み、大切に読み語りをしていきたいと考えています。

◆【 伊達悦子 】

『康子十九歳 戦渦の日記』から「つなぐ」

内務省の官吏であった栗屋仙吉を父に持つ康子の家族は、経済的にも恵まれた家庭でした。戦争の足音が高まる 1943 年、父は乞われては広島市長となり、母や幼い兄弟、孫である長女の子とともに赴任していた広島で、1945 年 8 月 6 日の原爆投下により亡くなりました。即死でした。生き残った母を看病するために康子は入市しますが、母もなくなりました。家族愛の強い康子は、母の亡骸を自分の手で茶毘に付します。そして翌年の 11 月原爆症により 19 歳で亡くなりました。

19 歳の少女は自分の思いを日記や手紙に書き残しています。その中に残されていた言葉の中に時代を反映する表現が出てきます。聡明で、その人格を誰もが認める康子であっ

たのにその表現が、じわじわと戦争を賛美し、戦意を高揚するようなものに変化し、皇国の女性に変わっていきました。あんなに聡明で、優しかった康子が……。 「その時の人たちの思いは全てそうなのか」「そうさせるものは」「人を一部の人間で統制するには教育しかないのでは」と考え康子と同年代を生きた人の思いを知りたいと思いました。そこで『田辺聖子 十八歳の日の記録』と1941年12月8日太平洋戦争開戦時に満二十歳未満だった女性27名によるエッセイ集『少女たちの戦争』につながりました。

『少女たちの戦争』の著者の最年長は、1922年5月生まれの瀬戸内寂聴当時十九歳、最年少は、1938年6月生まれの佐野洋子です。1931年9月に満州事変、1937年には日中戦争が始まり、1945年8月15日まで15年間戦争が続きます。彼女たちが、物心ついたときは戦時下でした。ここでの文章がすべて戦争をテーマにしたものばかりではありませんが、非日常が日常であった時代に幼年期や青春期を送った彼女たちが何を思い、どうすごしたかを読み取ることができました。少女たちにも少女たちの戦争があり、日常がありました。それは<男たちの戦争>からは、最も遠いものかもしれません。

27人のひとりの黒柳徹子さんは、『スルメ』と題して当時の(小学生低学年)の思いを語っています。徹子さんがスルメの味をおぼえたのは、この頃でした。出征する兵士を駅に送りに行くとき細かく裂いたスルメがもらえたそうです。おやつもない時代とはいえ、スルメをもらうために駅に行って出征する兵隊さんに旗を振っていたことに、小学生とはいえ戦争に加担していたのではないかと、申し訳ないことをしてしまったと自分を責めました。そして、「このことは私の心のどこかにひそんで(ママ)いた」と自分のことを責め続けたそうです。幼い子供までもいつのまにか戦意高揚の道具となり、多くの人々に聖戦として認識させるに至らせるものは「教育」に他ならないと考えさせられた。

『田辺聖子十八歳の日の記録』は、書かれた時から75年の時を超えて発見されました。康子さんとはほとんど同年代を生きた田辺聖子さんの日記は、自宅を整理しているときに見つかったもので、グレーの紙封筒の表には「昭和20年4月から12月 学徒動員 空襲罹災 父病臥 母、買出しの日々 聖子日記」と書かれていた。丁度、戦争をテーマにした田辺聖子さんの番組を作ろうという動きがあったときのことで 姪にあたる人は不思議な気持ちがあったようだ。

当時、数え年18歳になった田辺聖子さんは樟蔭女子専門学校(現・大阪樟蔭女子大学)の国文科二年生。向学心にもえて入学したが、ほとんどの時間は、学徒動員として飛行機部品工場で働くこととなった。その工場は兵庫県尼崎市にあり、そこでの寮生活の様子から日記は始まる。<四月一日 日曜日 晴 新しいノートをおろして、新しい日記を書こうとは、ずっと思っていたことだが、キリがわるいから、四月からにしようと思まことにしていたのである。それくらい、わたしは”日記”というものに執着をもっている。日記は好きである。日記は書けば書くほど、心の中が整理され、頭も澄み渡って来る。反省が出来、奮発心が起こる。日記はいいことである。……>と日記に自分を表現することを明記している。戦況が悪化する中でも工場寮では、その工場の女工さんの女学生に対するいやがらせのようなものもすなおに書かれている。学業は思うように進んではいないが、学徒動員で学業のできないことも日常になってくる。<…ラジオがしきりに言っている。どこやらの女学生が血書して、鉢巻に和歌を書き、日の丸を血染めして特攻隊に贈ったそうである。特攻隊はそれを緊めて(ママ)敵艦に突

入したのである。和歌は拙いものであったけれども、その真情は汲める気がした。たしかに私は、熱情においてはこの女学生達に負けないけれど、果たして勇氣において、この人達にまけないという自信があるだろうか。>ラジオからしきりに流れる放送にわが身を不甲斐なく思うように気持ちに変化していく。終戦の8月15日の日記は<何事ぞ！>のひとことが書かれていた。家を焼かれ、父を喪い、青春の時を奪われ、学びの機会を奪われてもなおこの戦争を「聖戦」と信じさまざまな苦難に耐えてきた「軍国少女」の抑えきれない思いが、悔しさが込められた一言に違いない。この日本が、降伏したことに対してである。

ここまで頑なに戦争を賛美し、自己を犠牲にしてまで戦争に向かわせるようにしたのは、「教育」の力である。戦うことを否定するものは、片隅に追いやられ、戦争を推し進める勢力は少数であるにもかかわらず強靱に社会に入り込んで、「国民総玉砕」も辞さない決意を少女たちにまでさせる。それは、「軍国少女」の十七歳の田辺聖子の日記から読み取れる。

後の田辺聖子さんは、楽しいはずの青春を戦争に奪われ、死んでいった若い人々への哀惜を深く感じていた。田辺聖子さんは何十年たっても、小説やエッセイなどに戦争への思いを書いている。そのひとつが『私の大阪八景』だ。戦時下でも失われなかった大阪人のたましいを書いている。戦時下に書き続けた軍国少女としての日記が、土台にある。ひとたび戦争となれば、非日常が日常となり、<男の戦争>があり、女性や弱き者たちは、沈黙・我慢の日常に追い立てられていった現実を語りながら、そのなかでも自分たちの日常をしたたかに生きぬいていく人たちを描くことで死んでいった人々への哀惜の念を田辺聖子さんらしい口調で著している。戦争という非日常は、人間としての感性を失わせてしまう。何がそうするのかの真実を見抜く目をもたなければならない。「教育」が、日常から非日常に変えていく力になってはならない。子供達に、真実を見抜く力をつけていく手助けをこれからも続けていきたいと思います。

読書会では、戦争の本質についてその裏付けになるような本について知ることができました。色々な視点での意見が交流でき「自分で課題本を」の読書会は私にとって大変意義深いものでした。

康子さん、読書会のみなさん、この感想文を読まれた方々とともに地上から戦争がなくなることを目指しましょう。「声」をつなぐ私たちは、私たちそれぞれに出来ることをやりながら繋がっていきましょう。

◆【 T 】

『ダウンタウン・ヒーローズ』 早坂 暁著 新潮社 1986年

本作品は、早坂さんの幼少期からの出来事が書かれているが、主には戦前・戦中・戦後の旧制松山高校時代の早坂さんを中心に書かれている。当時の風俗と共に、青春時代を過ごした松山周辺の人々や友人との関わり、戦争に翻弄される人々が描かれている自伝的小説である。八つの短い話「刺青」「わが大正座」「女相撲」「別嬪さん」「続・別嬪さん」「夏が来れば思い出す」「理髪師チッターライン」「松山マフィア」で成っている。

戦中戦後の混乱。その中で青春時代を過ごし、時には悩んだり、迷ったり、時にはやりすぎたりしながらも、周りの人たちに温かいまなざしを向けて生きてきた主人公。遊郭の女性となじみになり入りびたるようになり刺青を入れるに至った。【自分が何者なのか、何者になろうとしているのか一向に判らなかった。・・・焦れた揚句に刺青を彫って自分を決定しようとしているのだった。】

早坂さんは、海軍兵学校に入り、半年で終戦になり復学したが、『国のために戦えと言って教育した教師が悪かったとも言わずに、教科書を取り出して黒く塗りつぶせと言って授業を始めるので本当に腹が立ちました。教師、教育に対する不信感を持ちました。先生は間違った教え方をしたと言わなかった。

『早坂暁 母を語る(H16/10/19OA)より』大きな葛藤を抱えて生きていたのだと思われる。しかしながら、本作品は深刻な語り口ではなく、ユーモアもあり、時にはクスッと笑いが出るような作品で占められている。ほまえ(おなら)名人の話や、日に一度は誰かの肌ジュバンがやぶれる女相撲の話、才能あふれる友人たちとの交流……。とても読みやすく、気づいたら読み終わっていた。

しかし、彫り師の源次郎は、広島で仕事をしていたが原爆で松山に引き揚げてきたし、ほまえの名人は、広島に行き原爆にあい帰ってこなかったし、ほまえ名人と結婚した女相撲の桃が峰は、夫を探しに広島に生き二次被ばくで亡くなったし、満州に渡った女相撲の雪錦はソ連兵に殺され、子供は満人の手に託されたそう。このように、当時の人々がいかに辛い思いをしたかも描かれている。

当時の人々は、戦争に翻弄され、日々大変な思いをしながら生活していたが、その中でも、人々の逞しさやしたたかさがあつた。

大正座というのは、実家の芝居小屋兼映画館のことであるが、「わが大正座」の中に実家のお父さんの話がある。【戦争が終わった日、「朝からずうっとラジオ聞いとるけど、映画やたらいかんとは言うてない。役場からも、警察からも何も言うて来てない。」と言って、日本が敗けた日、「女巖窟王」とチャンバラを上演した。客が来ないかもと考え入場料は無料にしようかと考えたが名目が見つからない。結局無料にしなかったが、実際は満員になった。】敗けて打ちひしがれた人ばかりではない、さあ、黒幕はずして映画が見られると喜んだ人々もいた。

◆【 K子 】

『わたしの終戦記念日』 インタビューー瀬谷道子 新水社 2010年

8月の課題本は『康子 19歳 戦渦の日記』を受けて自分学習をしようということです。さて どうしようかと思いましたが 二点間の最短距離は直線 横着の極み！7月の課題本の関連図書として担当の方が三冊紹介してくれていました。その中の一冊です。

内容は12名(女性)の著名人へのインタビュー本です。

全員に質問事項は次のとおりです。

- ① 終戦の日の年齢と場所
- ② 戦争体験 その時何が起こったのか
- ③ 戦争をくぐり抜け、それからどう生きてきたか

④ 若い人たちへのメッセージ 平和への思い

- ① 年齢はまちまちです。場所は実家・疎開先・旧満州等
- ② 一様に空腹、疎開先でのいじめ、肩身のせまい思い(親世代)
玉音放送を聞いた時、ほとんどの人がよく聞き取れず、何を言ったか理解出来ていなかった。驚きは悲壮感がなく
 - ・これで電気がつけられる
 - ・解放感に満ち満ちていた
- ③ 12人とも高等教育を受けていましたのでへこたれることなく自分の才能、特技をフル稼働して、まず自立する。男性に依存することなく世の中の不合理矛盾に対しても女性差別とも戦い突き進んでいく。12人ともその道での成功者です。
- ④ 次世代の人へ、黙っていても駄目
 - ・自分の中になにかキラッと輝くものをもつ
 - ・「おかしい」ことには声をあげる
 - ・わが子が殺されるのは嫌だと断固として言う
 - ・女性は自分の人生を自分で選んで決めてほしい

私ごとですが……

12人の両親の考え方が素晴らしい(瞬時の判断とか)

母親の例(娘が新聞も読めない生活をしているので不在中の新聞を残しておく)自分は食べなくても子どもに与える。

77年間平和でした。でも現在本に書かれている様なことを私達は映像や画面で目のあたりにしているのです。

どうなるのでしょうか？どうすればいいのでしょうか。

◆【 SM 】

退会されても感想文を読んでもくださっている方々に感謝しながら、まとめてみます。

“言葉”は文学を創造し歴史も記憶する等尊いものである。しかし遣い手が“人”だから難儀でもある。例えば日記などの書き言葉には真実もあれば、虚もある。また話し言葉にも心に想うままのこともあれば、心とは裏腹なこともある。とにかく自在なのである。

7月の課題本で康子さんが梁さんに言った話し言葉、「特攻に行く人は誇りだけど、それを強いるのは国として恥である」。私はこの言葉の中に、彼女の心に想うままの真実を見た。有事にあつて冷静に国策の愚を見抜いている康子さんの胆識に感銘を受けた。そこで特別攻撃隊にかかわった人達がどんな話し言葉や書き言葉を残しているか調べたくなった。

まず、特攻隊員本人はどのような言葉を遺したか？特攻隊員の穴澤利夫少尉は、中央大学時代の同級生であり婚約者の智恵子さんに宛てた最後の手紙に「穴澤は現実の世界にはもう存在しない」としながらも「智恵子 会いたい 話したい 無性に」という言葉を残して知覧飛行場から出撃した。特攻隊の命を受けたがゆえに両家から結婚を猛反対され、穴澤は

失意の中で愛する人に最後の手紙をしたため飛び立ったのだ。戦争という理不尽な中で無慈悲な軍策に従わなければならず、何一つ思い通りになることはない。彼の葛藤に私はどれだけ共感できているのだろうか。想像を遥かに超えている。穴澤の訃報を知った智恵子さんも気持ちの整理がつくまでに10年余りの時がかかったと言う。智恵子さんは穴澤さんにしてあげたかったことを再婚者にしてあげた。再婚者に許可を得て、穴澤さんの墓参りに行けるようになったのは、頭に白いものが見え始めた頃だった。

次に、知覧飛行場から飛び立つ特攻隊員に対し、最期の数日間、食事等の世話をし、隊員から慕われた富谷食堂の鳥濱トメは「私は多くの命を見送った。引き留めることも、慰めることもできなくて、ただただあの子らの魂の平安を願うことしかできなかった。だから、生きていてほしい。命が大切だ」と言った。一方、彼女を慕う隊員の一人宮川三郎軍曹は「小母ちゃん、死んだらホテルになって帰ってくる」と言い残し、翌日実際にホテルになって帰ってきた。その様子が『ホテル帰る』に著されている。世話になったトメへの感謝と我が生きることへの未練を強く感じる。一人でももっと多く、もっと生きていて欲しかった。

また、隊員の生活などの世話係をしたのが知覧高等女学生「なでしこ隊」だった。『群青』には「敢えて突撃のことは話題にせず、他愛のない話をした」とある。今年、毎日新聞8月14日(日)朝刊1面に元女学生が見送りの際には「ただ黙って」とある。隊員の心中を察すれば、言葉など出るはずもなく……。特攻隊員の穴澤少尉でさえ、笑顔を返すのがやっとで……。鳥濱トメは、終戦後、亡くなった特攻隊員の慰霊を続けた。「特攻隊を美化するのか！」と、どんなに非難に晒されても慰霊を続け、知覧町に働きかけ「知覧特攻平和館」の設立に貢献した。「亡くなられた人を想う」と言葉にするのは容易いが、何年も行動し続けるには、覚悟と執念と情念が要る。鳥濱トメさんの生き様に感服！戦後77年も平和な日本を創り上げた特攻隊員439名が最期に遺した言葉に、触れなければ私の一生は終われない。

さらに、今西祐行が著した『すみれ島』を読み返すうち、特攻隊員への想いや家庭での様子を知った。彼は特攻隊員ではなかったが空軍の飛行隊として知覧の近くにいた。広島へも被災者救護に当たり、被爆している。沖縄へ向かう飛行機の中で、上空から奄美大島付近を眺めたとき「特攻機のことを思われて胸がいっぱいになった」のが創作の発端と語っている。「美しい景色の上をいろんなことを思いながら飛んだと思うんです。そうした特攻隊員の想いがどこかに残っていてほしいという祈りみたいなものがあつた」とも。長女の今西くみさんが記憶しているのは「どうして僕だけ生き残っちゃったんだろう」というつぶやきだ。『ヒロシマのうた』『一つの花』など多くの戦争にかかわる著作を残したが、亡くなるまでの約60年間を彼はこの想いの中に生きていたのかと愕然とした。戦後を生きた多くの人々は、今生きていることの喜びと同時に生き残った責めも感じながら生きているのだろう。生きるとはなんと難儀なことか。

今回特に驚いたのは『特攻隊振武隊 帰還兵は地獄を見た』の事実だ。特攻帰還兵は、「振武隊」に幽閉され、「どうして生きて帰ったのか。次は絶対死んでこい！」と侮蔑され、殴打され続けた。生きて恥をかくより、潔く死んで散ることをよしとする日本の文化は奇異である。戦争大義の前に個人・人権などありやしない。精神主義の末路に未来はないと言いたい。

この本を読んだ鴻山尚史は『不死身の特攻兵』を執筆した。特攻隊員佐々木友次は、9回出撃して9回生還した。彼の心には岩本益臣軍曹の言葉「無駄死にせぬように」があつたからだ。佐々木隊員は岩本軍曹から飛行技術をたたき込まれた。だから突撃命令をした上司

に「死ななくていいと思います。死ぬまで何度でも行って爆弾を命中させます」と言っただけ。日本の戦時下でこのような言葉を遺す特攻隊員が存在したのだ。岩本軍曹は特攻隊として命を受け出撃し、生還することはなかった。

今年の夏学習は「特別攻撃隊」になった。陸・海軍合わせて約4000人の若者が特攻隊員として命を落とした。悲惨で苛酷な状況下におかれても、人としての尊厳を保ちながら生きてゆくことの意義深さと難しさを改めて痛感している。後世を生きる者からすると、その人の生き様と合わさった真実の言葉が光って観える。

数年前の私は、有事になったらパニックになり思考停止になるだろうと安易に想像できた。しかし『夜の霧』の精神分析学者フランク、『アウシュヴィッツの囚書係』のディタ、『康子十九歳 戦渦の日記』の栗屋康子、『不死身の特攻兵』の岩本益臣少尉、その教えを受けた佐々木友次に出会い、誰も彼も「内的な拠り所」をもっている様に感じる事ができた。

平時に見える今だからこそ、内的な拠り所を思案し、できるだけ言葉にしていきたいと願いながら、今年8月15日の終戦記念日を迎えた。

【参考文献】

- ・『知覧からの手紙』 水口文乃著 新潮社 2007
- ・『ホテル帰る』 赤羽礼子(鳥濱トメ次女)・石井宏著 草思社 1996
- ・『群青』 知覧高女なでしこ会著 高城書房出版 1996
- ・『すみれ島』 今西祐行文 松永禎郎絵 偕成社 1991
- ・『特攻隊振武隊 帰還兵は地獄を見た』 大貫健一郎 渡辺 考著 朝日文庫 2015
- ・『不死身の特攻兵』 鴻上尚史著 講談社 2017

◆ 【 MM 】

7月の課題本 『康子十九歳 戦渦の日記』

原爆投下時広島市長だった栗屋仙吉を父にもち、父を支える母、姉や弟妹たち、家族みな仲がよく経済的にも恵まれた家に育った康子。戦争が家族を引き裂いていく。過酷な状況下でも日記の中で自分を鼓舞し、前を向こうとする。

配属になった工場で会った台湾人の梁たち同年代の男子学生とのやり取り、憧れの本位田区隊長の言動、離れて暮らす姉弟たちとの手紙での交流など様々なことが日記に書かれている。辛い状況の中で人を勇気づけたり自分を励ましたり。日記の中の康子は清廉な人の見本のような感じがした。どんな時にも小さな喜びや思いやりを大切に希望を持つ。死を恐れない梁にかけた言葉にもはっとした。自分を持っている女性なのだなど。康子が日記の中に書いている世界はすごく尊いと思うけれども、何かが私の中に引っかかる。読書会に参加してそれが何なのか考えるきっかけをもらった。

「日記は見られるものを前提としたもの」——私は先入観で日記は自分の気持ちを吐露するもの＝自分の秘密のようにとらえていた。しかしここでの日記は「当時の女学生は、お互いの日記を親友に読んでもらうことはあたりまえだった。康子も増枝に自分の日記を読んでもらい、増枝もまた康子に自分のものを読んでもらった」と本文にあるように私が思っていた日

記とは全くことなるものだったのだ。

人に読んでもらうことを前提としているものは、作られたものが含まれていなかったか。「こう思ってもらいたい」「こんな風にありたい」など、自分を作る何かは含まれていなかったか。

それに気づくと、この本自体が日記を用いた物語のように感じた。少しの日記と史実の間にドラマチックな文章を挟んだ物語になっていないか。私が感じた引っ掛かりは、作者の顔が見えすぎることだった。栗屋康子より門田隆将の書く文章の方が存在感が大きかった。読書会で出た「この人はどこを向かせたいのか」、この言葉が気になって次に読む本が広がっていった。

『なぜ君は絶望と闘えたのか 本村洋の3300日』 門田隆将著 新潮社 2008年

7月の関連本としてあったのでこちらを借りて読んだ。この本は1999年、山口県光市で起きた光市母子殺害事件を取り上げた本である。9年に及ぶ取材が明らかにする一人の青年の苦闘の記録。

なぜ関連本の中この本を手にとったかという、この事件が起きた場所は、私の祖父の墓があるお寺の近くで起きた事件で身近に感じていたということも大きい。それから、犯罪被害者の本村洋さんは司法から見ると守られているのは犯罪者の方であって犯罪被害者の権利は守られていないと市民に訴えさまざまな活動を通して法律を変えた人というイメージがあったので読んでみたいと思った。

この本を読んで感じたのは、作者の門田隆将は文章はうまく引き込まれるが、少し目線を引いて見てみれば、「そんな個人的なことを細部に至るまでどうしてあなたが知っているのか」「見てきたような書き方だ」という印象を持つと同時に、作者は読者にどう感じてもらいたいか、が明確にあるのだろうかと思った。この点は『康子十九歳 戦渦の日記』でも感じたことである。

栗屋康子さんは亡くなっているから『康子十九歳』を読むことはないが、本村さんは『なぜ君は絶望と戦えたのか』を読んでどう思っただろう。康子さんも生きていたらなんと言っただろう。

原爆投下の頃に書かれた日記にまつわる本をあたってみたが深堀りしたい本には出会えず、以前読んだ本で思い出した本を手にとった。

『1944－1955年 少女たちの学級日誌 瀬田国民学校五年智組』 解説 吉村文成 偕成社 2015年

太平洋戦争のさなか、琵琶湖のほとり。戦時中の5年生の女子生徒たちが1年間描き続けた、188枚の学級日誌の記録。

この本を手にとった理由は、以前読んだときに終戦間近の日誌だがカラフルな日誌で表現ものびのびしており子供らしさにあふれているところと後半になるにつれて戦争標語など子供らしくない言い回しが心に残っていたからだ。前はパラパラと早読みしてしまったので今回はじっくり読んだ。

本の冒頭、「瀬田国民学校学級日誌」が描かれた理由が当時の担任だった西川先生により四点あげてある。

一 瀬田国民学校の校長、矢島正信先生は「総合教育」に一生懸命だった。絵日誌は「総合教育」の一環として、大切なものだと思った。

二 戦時中なのでテレビはもちろん、本や雑誌、絵本など、子どもたちの文化や表現力を育てるものは何一つなかった。文化がないなら自分たちで文化をつくっていかなくてはならない。

三 子どもたちが成長して大人になったとき、この絵日誌を見て当時のことをなつかしく語り合える機会があれば、より絆が深まる。

四 戦争を知らない後世の子どもたちが、この絵日誌を見ることによって、戦時中のことをすこしでも、理解してもらえと思う。

一にある校長の矢島正信先生は土に親しむ教育、ほめる教育を大切にしていた。校長は先生のこともほめたりすることがあったという。担任の西川先生もクラスの子どもたちをほめて育て、日誌も自由に書かせた。間違いがあっても訂正を入れることは少なかった。子どもたちものびのびと、日誌の中で表現できたと思う。日誌の係は7人いたのだが、それぞれに文字や絵に個性があって読んでいてほほえましかった。

二の理由は素晴らしいと思う。文化がないなら自分たちで文化をつくれればいいと考える先生がいてそういう風に考えられる人が先生で本当に良かったと思う。この先生方の考えに触れた子どもたちの未来は明るい！と強く感じた。

三についてはこの本のなかで感じる事ができた。この本の中で日誌係の7人のうち5人の人が集まって当時の日誌に「この時はこういうことだった」とか「こういう気持ちだったなあ」など補足が書かれていて、振り返ることができる現在の平和を感じた。

四についても強く共感した。私のような戦争を知らない人が読むことも大事だと思う。この本は戦時中の言葉の説明についても丁寧な説明がついていて子どもでも読めるのでいろいろなところで取り上げてほしい。

私の心に一番残ったのは6月6日の日誌だ。本郷さんという方の壮行式のことについて書かれていた。今回本になるにあたって係の人が書いたその日の補足で「本郷君は、わたしの親戚やった。親族が本家に集まってお祝いしたとき、本郷君の奥さんが台所のすみで泣いてはるのを見た。「お祝いなのに、なんでやろ」と不思議に思うたんや。」とあった。これが真実だ。戦争に行くお祝いをして万歳万歳と言っている親族は涙。そしてその頃の子供は「なんでやろ」と不思議に思う。子どもは心から万歳万歳と叫んでいたのだろう。それを当たり前にしてしまう戦争って本当に恐ろしい…。

当日は参加者それぞれが一か月の間に読んだ本を紹介しあい、どれも私にとっては新しい本で興味深かった。何冊かは予約をしたので読んでみるつもりだ。ひとり読書だとひとつの感想、ひとつの読み方だが読書会に参加することで一気に考えのヒントが増えるので楽しい！